

# Daydream Believer

藤井 匡 (東京造形大学准教授)

國府理の主題は失敗である。《Typical Bioshere》(2009-2010)では、かつてアメリカで行われた人工生態系の実験が参照されている。だが、彼の着眼点はその実験が失敗したことにある。《Natural Powered Vehicle》(2004)では、化石燃料を用いないセイル付きの自動車が旅を続けていく。ただ、その旅は風力発電用の風車の手前で終わる。目的地に到着することはない。《水中エンジン》(2012)では、動力ではなく単に熱だけを発生させている。最終的には、エンジン自体がその熱によって損傷することになる。こうした傾向は、最初期の《自動杭打ち機》(1990)にまで遡って確認することができるだろう。

しかし、何かが単に失敗することと、その失敗が彫刻として提示されることの意味は全く異なる。美術は本来的に、そのような失敗と結びついているからである。その意味で、國府の作品は美術の歴史を正統的に体現していたとすることができる。

ボリス・グロイスは、芸術と社会との関わりを、芸術とデザインの区別から始めている。<sup>1</sup> デザインは現状をより良く、より魅力的に、よりスペクタクルなものに変えることを目的とする。それに対し、芸術は機能を奪われ、役に立たないものとして美術館の中に存在する。その目的が達成されないことによって、現状を否定し、それを過去のものとして提示することになる(これが近代以降の美術が人々に人気がない理由だという)。そのことによって、芸術が現状に対する批評性を獲得することを指摘するのである。

グロイスがここで例示するのは、未来派のマリネッティとロシア・アヴァンギャルドのタトリン。思想的な立場は大きく異なるものの、テクノロジーを称揚し、そのことを通して政権との関係を構築しようとしたことに両者の共通点を認めようとする。さらに、テクノロジーのつくり出す未来に最終的な破局を読み込んでおり、そのために政権から疎まれていくことになる点も共通すると言う。グロイスは、この点にこそ芸術の可能性を見出すのである。

政権との関係はともかく、テクノロジーを用いることやその未来を提示する点で、國府の仕事はマリネッティやタトリンの延長にある。それだけではない。その未来が決してバラ色のものでないことを示す点でも彼らの延長にある。廃車となったフォルクスワーゲン・ビートルの車体がクジラの化石と重ね合わされる《ROBO Whale》(2008-2009)は、テクノロジーの導く未来がどのようなものであるかという彼の思想を最もよく表している。

國府の仕事の中で、《電動三輪自動車》(1994-2004)はデザイン的な要素の強いものに思われるかもしれない。それは、実際に走ることを目的に、実際に走る機能を追求して制作されている。一見は、プロダクト・デザインのようにすら見えるだろう。それでもなお、この作品は——グロイスの用いる意味において——デザインではなく芸術である。物理的には実現可能でありながらも制度的には不可能であることを露呈するからである。安全性・耐久性・利便性・費用対効果など現実的な条件を少し考えれば、現実の社会が許容しないことが明らかになる。

私はかつて、このような國府の仕事が現実の社会に対する批評＝批判としての力をもつことを指摘した。<sup>2</sup> 基本的に、その考えは現在でも変わっていない。今そこに補足をするならば、その批評＝批判は失敗を主題とすることによってこそ革命的なものとなることである。

しかし、國府の仕事にそうした革命的なものを見出すことは一般的ではないかもしれない。表面的には、彼の姿勢に社会的なものを認めることは困難だからである。事実、彼自身はそれを「夢」という言葉で表現した。それは現実離れや現実逃避と誤って受け取られやすい。だが、ジョン・レノンが『イマジン』で「You may say I'm a dreamer」と歌った意味での革命性がそこに含まれていることを読み取らなければならない。

國府自身は《KOKUFUMOBIL》(1994)について、「ここではない何処かへ連れていくことができる、その可能性こそが重要な機能だった」と語った。<sup>3</sup> ここで重要なのは、それが可能性に留まり続けることである。実際にどこかに行きたければ、既成の自動車を運転すればよいだけの話である。わざわざ彫刻をつくる必要などない。彼はそれでは解決しない何かについて考え続け、提示し続けたのである。

結局のところ、その夢は夢として、可能性は可能性として留まるより他はなくなってしまった。現在の私には彼の残した革命性について考える続けることしかできない。だとすれば、それを愚直に実行するだけである。私にとって、アーティストを追悼するとは、それ以外の方法はないからである。

1. Boris Groys, On Art Activism, e-flux 2014

2. 拙稿「彫刻の退屈さ」を超えて」『KOKUFUMOBIL:回転する歯車は並行世界の夢を見るか?』会場配布資料 2011

3. 『國府理 未来のいえ』西宮市大谷記念美術館 2013 p.14